



スリッパや内履きと同居している化石や恐竜たち。よく見ると、恐竜の硬そうな背中や尖った顔など、細かく表現されている。

子供にとつての自由感

主体性と意図性のバランスは、

玄関をくぐると「げんたいはくぶつかん」の文字が目には飛び込む。そこは紛れもなく『下足箱』である。本来の用途からはおよそ想像もつかない状況を前に、思わず「そうきたか」と唸ってしまう。感動に浸っていると、子供たちの元気な声が聞こえてきた。「今日も探検に行くぞ！」どうやら下足箱に入っている小枝や石は、外で見つけた恐竜の骨や歯、化石のようだ。そしてそこにいる2頭はまさに恐竜。それで博物館かと、合点がいった。室内と外の遊びがつながり、この子たちはここ数日の間、化石探しの探検に夢中のことだった。

保育者のこころがすこし余白を生かす

保育参観後、下足箱について、保育者に尋ねてみました。昨今、出生率の影響もあり、入園児が少しずつ減少傾向にあり、下足箱が余っているという状況が生じているのだということでした。人数が少し減ったとは言え、今年の年中児はとて元気で、今とはとにかく探検隊になるのが大好きで、探検隊の道具を身に付けてたまま登降園する子もいるとのこと。遊びが続き、見つけた化石類がどんどん増えていく様子に、保育者は「見つけた化石やつくった恐竜にこの子たちが愛着をもち、大事にしていってほしい」と思っていました。そしてどこかにいい置き場所

はないかと探していると、こまに余っている下足箱が目にとまり、子供たちに提案して今に至った、ということでした。玄関は室内と外をつなぐ場所、必ずみんなが通る所です。自然とみんなの視線も集まります。すると、探検隊の子供たちに「博物館」というイメージが湧き、今は「化石を展示する」ということを楽しんで展示するということでした。子供たちはこの展示場所をとて気に入っているとのことでした。朝、登園が不安定だった子も、自分の遊びをみんなに見てもらえて嬉しかったようで、今はやりたいことにどんどん向かっていて明るくなったとのことでした。さて、環境を準備するとき、あえて「余白をつくる」「余白を残す」という感覚は大切です。例えば、ルールや決まりが多く自由にはできない環境、ぎゅうぎゅうと隙間なく物で溢れた環境、このような余白のない環境では、子供本来の創造的な思考は発揮されにくくなってしまう気がします。本事例の保育者は、先生自身が余白を自由に取込み、生かすのが大好きな方のように、生かすのがつくづく思うのですが、「余白の面白さ」が見える先生というのは、物的環境に対する知見の深さに留まらず、子供の伸びしろ、つまりその子に育とうとしている可能性を瞬時に感じ取るのが上手な先生でもある気がしてなりました。探検隊の子たちの様子

や環境構成の工夫を見て、改めて感じました。

ちよこつとメモ

環境を通して行う教育は、遊具や用具、素材だけを配置して後は幼児の動きまわに任せるというものは本質的に異なるものである。もとより環境に含まれている教育的価値を教師が取り出して直接幼児に押し付けたり、詰め込んだりするものでもない。環境の中に教育的価値を含ませながら、幼児が自ら興味や関心をもつて環境に取り組み、試行錯誤を経て、環境へのふさわしい関わり方を身に付けていくことを意図した教育である。それは同時に、幼児の環境との主体的な関わりを大切にしたい教育であるから、**幼児の視点から見たら、自由感あふれる教育である**と言える。

【教育要領等解説の抜粋】

この「自由感」という表現、どう面白いですか？小学校でも様々な教育方法がありますが、幼児教育の環境による教育の視点は、「子供の主体性と教師の意図性のバランス」に配慮する上で大変参考になります。余談ですが、この下足箱、一か月後に参観した際は、全く別の遊びの場として新たに活用されていました。

右の2次元コードを読み取るかクリックで回答をお願いします



ココです。

発行元
お問合せ先

山形県教育局義務教育課
☎023-630-3416 kuraokat@pref.yamagata.jp
※1：本通信における「幼小」は、「幼児教育と小学校教育」の略称として使用



アンケート
ご協力
のお願い